

生徒の学習力を育成する学習システムの開発と実践
—学校と家庭での学習をつなぐ効果的な学習法の指導を通して—

大佐古 倫徳
(教職リーダーコース E203D003)

1. 問題

(1) 家庭学習の重要性と課題

学力は、知識や技能など「学んだ力としての学力」と、学習習慣や効果的な学習方法など「学ぶ力としての学力」すなわち「学習力」に分けることができる。後者の学習力は、生涯にわたり学び続けていくうえで不可欠なスキルである(篠ヶ谷, 2016)。平成29年3月告示の新学習指導要領では、予測できない未来に対応するためには、主体的に問いを立てて、他者と協働しながら解決していく力が必要であると強調されている。学習力はその基礎とも言える。

しかし、学習力は、学校の授業中に教師の指示のもとで学習するだけでは、なかなか身につかない。そのため、自分の学習を自分で管理しながら、効果的に学んでいけるようにするには、授業以外の場で一人で学習する経験を積み重ねなければならない(篠ヶ谷, 2016)。このように考えると家庭学習は、単に机に向かうという習慣を身に付けるためのものではなく、学習力を身に付けるために重要である。

(2) 認知主義的学習観の重要性

植阪・床(2012)は、学び方を教えればそのまま身に付くものではなく、学び方の定着は、生徒がどのような学習を重要だと考えているかという「学習観」に大きく左右されると述べている。市川ら(2009)は、学習観を8つの志向として整理し、それらを大きく「認知主義的学習観」と「非認知主義的学習観」に分けている(図1)。学習力を身に付けるためには、認知主義的学習観の観点から、考えるプロセスを重視し、勉強に工夫をすることが重要である。

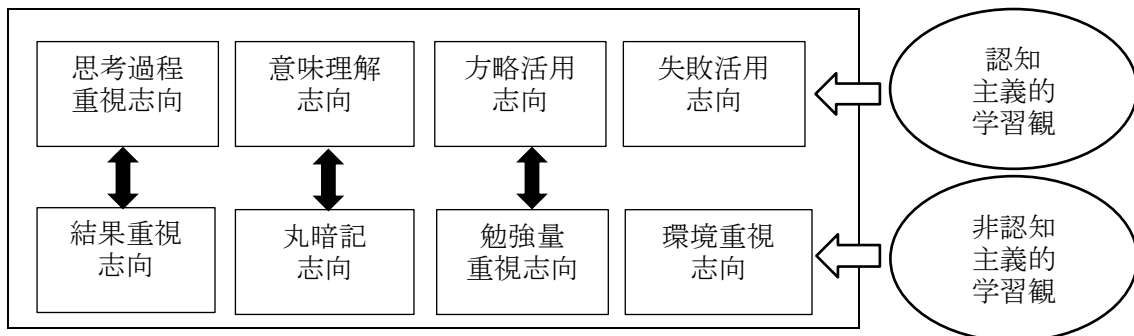


図1 学習観の構造 (市川ら, 2009)

(3) 学習方法を教えることの重要性

中学校になると勉強が難しくなり、上手な勉強の仕方が分からないという中学生が多い。また、書き取りなどの反復練習に終始し、浅い認知的方略の使用にとどまっている生徒が多い。一方で教員も効果的な勉強方法を示していない。学校が作成する学習の手引きでは、「テレビをつけない」「学年×10分学習する」のように学習規律のみが書かれていたり、勉強が苦手な生徒に具体的な方法を示せていなかったりする。そのため、生徒が自律的に学ぶためには、学習方法を教えることが重要である。

2. 実践

2020年10月から校内研修の機会に説明を行い、先生方のご理解をいただくことが出来た。2021年度、筆者は研修主任として一連の実践を企画・実施した。校内研修の場だけでなく、Microsoft社のTeamsを活用して、随時、連絡や説明を行った。

自分で管理する効果的な家庭学習にするために、学習の手引き、学習法講座、学習力通信、学習相談dayなどの様々な手立てを連動させた。以下に、それぞれの取り組みを示す。

(1) 学習の手引き『家庭学習の追究』の改訂

学習の手引き『家庭学習の追究』を、2020年11月～2021年3月にかけて改訂し、2021年4月に生徒に配布した。改訂にあたっては、次の方針を全教科の教員が共通に理解し取り組んだ。

[方針①]従来の手引きにあるような学習規律ではなく、深い認知方略、メタ認知方略、外的リソース方略など、認知心理学の観点から効果が高い学習方略を中心に伝える。

[方針②]従来は教科ごとにバラバラだった形式を見直して、全教科で統一して、予習、授業、復習、テスト勉強、ワークや自主学習ノートの見本という形で示す。

まず、県内小中学校の学習の手引きを教員間で回覧した。そして筆者が数学について改訂例を作成して示した。その上で、学力向上コーディネーターの呼びかけにより、教科部会を開催し、教科主任を中心に改訂内容を検討した。

5教科をA4判1枚にまとめた簡略版と、A4判・17頁の9教科冊子版を作成した。簡易版・冊子版のいずれにおいても、教科ごとの学習方法(例「数学の授業では途中の計算や考え方を理解する」)だけでなく、全教科に共通の方法(例「自分の言葉で大事なポイントをまとめる」)も示した。

作成した手引きを配布するだけでなく、使い方を4月の学習法講座で説明した。生徒には、家庭学習をする際に見えるところに簡易版を掲示するように伝えた。また、生徒のタブレットPCのロック画面に設定した。このように普段から『家庭学習の追究』に目がいくようにした。

(2) 学習法講座

表1 学習法講座実施内容一覧

学級活動の時間を使って、効果的な学習方法を説明する学習法講座を、2020年10月に1年生を対象に一回行った。この講座を先生方に

日程	対象	指導形態	内容
2021年4月	全学年	学年全体	①手帳の使い方 ②学習の手引きの使い方
2021年4月	各教科	各学級	教科毎のオリエンテーション
2021年5月	全学年	学年全体	教科書を味方にする
2021年5月	1学年	各学級	期末テストに向けて
2021年7月	全学年	学年全体	夏休みの計画の立て方
2021年9月	1学年	各学級	勉強のやる気を出すには
2021年10月	1学年	各学級	期末テストで目標を達成するには

参観していただき、2021年度の取り組みについて理解をしていただいた。

2021年度は筆者だけでなく、全ての学年において各学年担当の教員が講師となって、講座を行った(表1)。その際には、筆者の作った原案をもとに、各学年担当の教員が学年の実態に合わせてアレンジして講座を行った。担任が講座を行うだけでなく、副担任や学年主任の先生も加わって、生徒を支援した。また「学習法講座のデザイン7原則」を作成し、一時間の授業としてどうデザインするか、共通理解を図った。こうした取り組みを繰り返すことで、学校全体として学習法講座への理解が深まった。

2021年度の最初の講座は、食堂ホールに1学年全員を集めて実施した。そのため効率的ではあるが、やや落ち着かず、個別の生徒の支援が難しいという課題があった。その後は、同じ内容の学習法講座を、各学級の担任が学級の実態に合わせて行うようにした。これにより、落ち着いた雰囲気の中、教員の指導も行き届きやすくなった。各担任が実施することで、面談の場で保護者にも学習法講座やそれに関する取り組みについて説明できたり、担任自身が生徒の困り感に目を向けて学習方法を生徒と一緒に考えたりするなど、教員や保護者にもプラスになった。

(3) 学習力通信

学習法講座の内容をもう一度確認し定着できるようにするため、A4判(両面)の『学習力通信UP』を2021年度に5回発行した。全学年、帰りの会で生徒一人ひとりに配布し、学級担任とともに学習法講座の内容をもう一度確認することで、より定着できるようにした。

この通信では、学習法講座で学んだ効果的な学習方法と、生徒による講座の振り返りを掲載した。それ以外にも、新聞に掲載されていた中学生の勉強法を紹介し、同年代の生徒が行う勉強法を知ることで、効果的な勉強法への関心が高まるようにした。また大学院指導教員(佐藤教授)によるアドバイスや、勉強方法に関するおすすめの本を紹介した。こうした書籍を佐藤教授から20数冊を借りて朝読書用に学級に配ったところ、生徒たちは熱心に読んでいた。

(4) 学習相談 day

2学期に中1を対象に数学についてアンケートをおこなったところ、ほとんどの生徒が予習に取り組み、予習で分からなかった点が授業で分かったと回答した。一方で、予習をしていない生徒や授業の理解度が低い生徒もいることが分かった。そこで、数学の困りごとや疑問を質問できる「数学相談 day」を2021年9月末に2日間、放課後に実施した。

2日間でのべ16人の生徒が参加し、授業やワークで分からなかったところを質問したり、筆者が用意したプリントに取り組んだりした。筆者以外の担任や大学院指導教員も加わって指導した。その結果、数学が苦手な生徒に細やかな個別指導ができた。自分の間違いの原因に気づいて類問に取り組んだり、友だち同士で教え合ったり、さらにプリント教材を家庭学習用に持ち帰ったりする様子も見られた。

「数学相談 day」での生徒の積極的な姿勢を受け、5教科の「相談 day」を11月の期末試験の前に2日間、1年生を対象に実施した。放課後だと参加できない生徒もいたため昼休みに設定したところ、2日間でのべ20数名の参加があった。筆者(数学)以外に、1年生で国語・英語・社会・理科を担当している教員が、指導にあたった。

3. 成果の検証

(1) 実践とその評価

学習の手引、学習法講座、学習力通信、相談 day など様々な手立てを通して、生徒に適切な学習方法を教えてきた。2020年度から校内研修の中で筆者の研究を説明する場を設定していただき、学校全体での理解のもと、多くの先生が関わってくださった。このように学校全体で学習方法を伝えることの必要性を共通に理解し取り組んだということ自体が、一つの大きな成果である。公開の学習法講座(1年生「期末テストで目標を達成するには」、2021年10月実施)を参観した小中学校教員からも、こうした取り組みの重要性を認めていただいた。

(2) 生徒の学習習慣

2020年10月に1年生を対象に、2021年4月と11月に全学年を対象に、学習習慣に関するア

ンケート調査を行った。

家庭学習の時間

各学年で2021年4月と11月の結果を比較すると、家庭学習に取り組む週あたり日数と、1日あたりの家庭学習時間が、どの学年でも4月より11月の方が多かった。

令和元年度の全国学力・学習状況調査結果によると、学校の授業以外に1日の勉強時間が2時間以上の生徒は36%である。これに対して本校(2021年11月)では、1年生47%、2年生51%、3年生85%と、全国を大きく上回っている。

予習・復習

各学年で2021年4月と11月の結果を比較すると、1年生では予習に取り組む生徒が増えた。2年生では復習に取り組む生徒が増えた。

また2020年10月の1年生と2021年11月の1年生の結果を比較した。2021年度は前年度に比べて、予習をしている1年生が増えていた。さらに予習の内容も、「教科書を読む」「語句の意味を調べる」「大切なところや疑問に思ったところに印を付ける」「授業でやりそうな問題を解く」など、様々な方法を活用していた。2021年度の1年生には4月に筆者が数学の授業で、「教科書を読んだり問題を解いたりして、分からない箇所に？印をつける」という予習方法を教えていた。また、「予習でわからないことを見つけてきて、授業でスッキリさせよう」と予習の大切さを繰り返し説いてきた。そうしたことが、結果につながったと思われる。

平成29年度の全国学力・学習状況調査結果によると、「家で授業の予習をしていますか」という質問に「している」「どちらかといえば、している」と回答した生徒は、32%であった。これに対して本校(2021年11月)では、1年生82%、2年生51%、3年生58%と、全国を大きく上回っている。また「家で授業の復習をしていますか」という質問に「している」「どちらかといえば、している」と回答した生徒は、全国では51%であったのに対して、本校では、1年生82%、2年生82%、3年生93%と、大きく上回っている。自分でやるべきことを把握し、計画的に学習の時間を活用できている生徒が多いと言える。

数学が苦手な生徒

筆者が担当した中1数学で、数学の苦手な生徒3名の取り組み方を観察し、生徒本人から話を聞いた。苦手な生徒であったが、次のように家庭学習を工夫できるようになった。

- ・自主学習ノートを使って、前時の授業のまとめ直し、既習事項の再確認、ワークの直し直しを行うようになった。その際に分からなかったところを付箋に記し筆者に質問したり、計算式を解く際のポイントを自分の言葉で記したり出来るようになった。
- ・本時の授業の復習と次時の授業の予習というように関連する内容を、自主学習ノートに行うようになった。
- ・ノートは後から見返した時に分かりやすいように書いたり、ポイントは短く分かりやすく書いたりするなど、自分に合う学習方法を見つけながら行うようになった。

(3) 生徒の学習観

2021年4月と11月に全学年を対象に、学習観に関するアンケート調査を行った。学習観は図1に示した8つの志向から構成される。あわせて「上手な勉強の仕方が分からない」という項目を示して、これにあてはまるか4段階で問うた。

4月と11月を比較すると、全体としては認知主義的な学習観が高く維持されていた。しかし1・2年生では「思考過程重視志向」(例「テストで出来なかった問題は、答だけでなく解き方も知りた

い)がやや低下していた。3年生では「結果重視志向」(例「なぜそうなるかわからなくても、とにかく答が合っていればいい)がやや上昇していた。ただしこうした変化は小さく、非認知主義的な学習観にシフトしたわけではない。また1・2年生では「上手な勉強の仕方が分からない」に対する評定が高まっていた。2学期になり学習内容が難しくなったこと、学習方法を意識するようになってきたことなどが原因と思われる。

(4)生徒の学力

2021年度に複数回実施された学力テストの標準点を分析した。その結果、1年生では4月・8月ともに、平均よりやや良い水準であった。2年生では4月より8月の方が高まっていた。3年生は毎月テストを実施したが、ほぼ平均水準の成績が維持されていた。

4. 考察

(1)本研究の成果

学校全体で適切な学習方法を教える取り組みを行った。その結果、家庭学習の習慣がついて、家庭学習に取り組む時間が長くなり、内容も豊かになった。またこうした取り組みを通じて、教員も生徒に合った学習方法を考えたり、面談の場で保護者と話題にしたりするなど、教員にとってもプラスの影響が認められた。

こうした成果が得られたのは、次の要因が大きいと思われる。

- ・2020年度から校内研修で説明の機会を設定してもらえた。
- ・2020年度の校内研修を通じて、取り組みの必要性を認識していただけた。
- ・筆者が「学習の手引き」の改訂例を示したり学習法講座を実施したりすることで、どう取り組むか先生方に理解していただけた。
- ・学習法講座の原案とスライドやワークシートなどは筆者が作成するなど、先生方が取り組みやすいようにした。

(2)本研究の課題

家庭学習習慣という点では成果が得られたが、学習観や学力という点では明確な成果は得られなかった。各学年の先生方に詳しく話を伺って、改善のヒントを探ることが必要である。

学習法講座を全ての学年で複数回実施したが、十分に上げられなかった内容もある。学校現場は教育内容が多く、学級活動の時間をきちんと確保できない。中学校3年間のカリキュラムの中で、いつどのような内容の学習法講座を設定するか検討する必要がある。計画的な講座の運営により、学習力向上そして学力の向上へとつなげていきたい。

また、校内研修の時間を活用しながら、教員も効果的な学習方法についての理解をより深める必要がある。そのうえで授業の中でも積極的に効果的な学習方法を教えていくなど、複数の手立てをより緊密に連動させる必要がある。

引用文献

- 市川伸一・南風原朝和・杉澤武俊・瀬尾美紀子・清河幸子・犬塚美輪・村山航・植阪友理・小林寛子・篠ヶ谷圭太 (2009). 数学の学力・学習力診断テスト COMPASS の開発 認知科学, 16, 333-347.
- 植阪友理・床勝信 (2012). 「自律的な学習者」を育てる学び方指導 VIEW21 中学版, 4, 3-13.
- 篠ヶ谷圭太 (2016). 授業外の学習の指導 岡田涼・中谷素之・伊藤崇達・塚野州一(編著) 自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術 北大路書房 pp.140-156.